

# なかよし広場

高学年1・3】

## 「心のノートを活用した取組み

(1) 主題名 自由と責任〔1・3〕

(2) ねらい 自由を大切にしながらも、まわりの人のことを考えて責任ある行動をしようとする心を育てる。

(3) 資料名 「なかよし広場」

(4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点
導入	1 「自由」について考える。	「自由」という言葉からどんなことを思い浮かべますか。 ・何でも自分で決められる。	「心のノート」P18, 19を読み、考える。
展開	2 資料を読み、話し合う。	あきらたちはどんな気持ちでソフトボールをしているのでしょうか。 ・楽しくてしかたがない。 ・多人数で盛り上がっているので、毎日の生活にもはりがでている。 おばさんに叱られたとき、あきらたちはどんなことを思ったでしょう。 ・ぼくたちの遊びのことだって考えてくれたらいい。 ・道で遊んでいるわけではなく、ルールは守っているはずだ。	自分たちの好きなことをして充実しているあきらたちの気持ちをおさえる。  自分たちの遊びを否定されたときのあきらたちの気持ちを想像させる。
開拓	3 あきらの心情について考える。	あきらはなぜあやまりに行く気持ちになったのでしょうか。 ・病気の人や赤ちゃんが安心して休めないなら、それは自分たちのせいだ。 ・自分たちの好きなことばかりではなく、人の迷惑も考えないといけない。	なおとの言葉を考えさせたり、どんな話合いがされたのかを想像させる。
開拓	4 自分の生活を振り返る。	自分の自由を主張し、相手のことを考えなかったり規律ある行動ができなかったりしたことはないですか。 ・遠足や修学旅行の乗り物の中で、つい気持ちが大きくなって、人の迷惑を考えなかったことがある。	自分たちの生活の中に「自由」と「自己勝手」を取り違えた行動はないか考えさせる。
終末	5 「心のノート」P20, 21を読んで考える。	あなたは「自由」をどのように大切にしていますか。 ・他人のことも考えながら行動したい。	何かを判断し、行動するとき、その結果に対して責任をもつという気持ちの大切さに気付かせる

## なかよし広場

ぼくの名前は、あきら。三度の「」はんよりソフトボールが好き。ソフトボールさえできれば大満足なのだ。そんなぼくにとつて近ごろとてもうれしいことがある。それは、学校でソフトボールをするのがはやってきたことだ。

「今日、ソフトできる？」

と、声をかけると、あつという間に十五、六人が集まる。今まで二、四人で細々とやつていたのを思うと毎日が楽しくてしかたがない。

今日もいつものなかよし広場でチームに分かれて試合が始まつた。このなかよし広場は、フェンスの上にネットまで張られていて、みんなのお気に入りの場所だ。

相手のピッチャーは、なあと。ぼくのライバルだ。昨日も空振りの三振に打ち取られて悔しい思いをしていた。（今日こそ打つてやる。）といつぼくの気合を入れて振りぬいたバットは、ホームランの手ごたえ。会心の一撃だ。天にも上る気持ちでベースを回つた。大喜びでチームのみんなに迎えられるはずが・・・（あれつ？）なんだか様子がおかしい。ふと気がつくとみんなが困った顔をしている。どうやらフェンスを越え、近くの家にボールが入つてしまつたらしい。

「何だ、また入つたのか。しょうがないな。時間がもつたいないからこつちのボールで続きをやろう。さっきのボールは、後からとりに行けばいいよ。」

ぼくは、自分のチームがこづげき中で、やつと同点に追いついたといつともあつて試合をこのまま続けようとみんなに声をかけた。みんなも、困ったような顔をしながらも

「あきらがそういうのなら・・・。」

と、試合を再開した。それから点をとつたりとられたりといつ緊張した試合が続いて、ぼくは飛んでいつたボールのことなんかすっかりわすれていた。突然、ボールを手にしたおばさんが怖い顔をしてぼくたちをどなつた。

「あなたたち、窓ガラスが割れたらどうするのよ。うちには病気の年よりも、生まれたばかりの赤ん坊もいるのよ。これじゃあ、安心して生活できないでしよう。もつと打ち方を工夫するとか考えて遊ぶことはできないの。それに人の家にボールを打ち込んで、あやまりにも来ないなんてどういうつもりなの。」

ぼくは、（せっかく、みんなで盛り上がつているのに・・・）と不満に思つたが、言いあらそいをしてもしかたがないので、すつきりしないまま引き上げた。

帰り道にぼくが、

「困ったなあ。あれじゃあ、もう広場でソフトボールができないなあ、これからいつたいどこで遊べばいいんだよ。」

と云ひ、「なあどが、

「ぼくは、おばさんの気持ちもわかるな。」

と、小さな声で言つた。

ぼくは、一晩中そのことが気にかかつた。

次の日の放課後、みんなで集まると昨日の話になつた。みんなの意見を聞きながらぼくは、（自分のことしか考えていないなかつたなあ。）と思つた。みんなでおばさんのところへあやまりにいくことにした。

おばさんの家を訪ね、

「すみませんでした。すぐにあやまりに来なくて。ぼくたち迷わくをかけないで遊べるよつに工夫します。」

と、あやまた。すると、おばさんが、

「おばさんのほうこそ、大きな声でどなつたりして悪かつたわ。みんなのよううに元気よく外で遊んでいるのはとてもいいことだと思つてるのよ。でもおたがいに相手のことも考えていくことが大切なんじやないかしら。」

と、やさしく話してくださつた。

ぼくは、昨日からもやもやしていた気持ちが晴れて、すつきりとした気持ちになつていた。

# 活用に生かすための実践報告

## 「なかよし広場」

### 1 主題の設定

- ・子どもたちは、自分がどうしてもやりたい楽しいことがあると自己中心的な価値観で物事を判断しがちである。学校以外の生活場面の中では、それが顕著となり、なかなか周りの人の迷惑を考えたり他者の立場になって自分の行動を決定したりすることがむずかしい。この教材は、子どもたちのくらしの中に実際にあったできごとをもとに自作した。自分たちの権利ばかり主張するのではなく他者の立場も考えながら自由を大切にしていく態度を育てたい。

### 2 指導過程の工夫

- ・実践では資料を、「なあとが『ぼくは、おばさんの気持ちもわかるな。』と小さな声で言ったことが気にかかった。」というところで切った。そして、「もし自分があきらだったらどうするか」と発問し、考えさせた。
- ・そして、自分だったらなかよし広場でのソフトボールを続けるのか、やめるのかについて理由をつけて発言させた。様々な価値観での発言を充分に聞きあった後、あきらたちがいけなかつたのはどこなのかを考えさせると自分たちのくらしの中で、足りなかつた部分を自分自身で内省していくことができると思う。

### 3 発問の工夫

- ・ねらいに迫る中心的な発問を「なぜ、あきらは謝りに行く気になったのか」に設定した。この発問により、謝りに行く・行かないではなくどのような経過の中で、あきらが心を動かされたのかについて迫ることができると考えたからである。

### 4 児童の反応

- ・やめる。子どもの勝手で年寄りや赤ちゃんの自由をとってはいけない。
- ・わたしがなかよし広場の隣の家でくらしていボールがきたらすごく怖いし、もし赤ちゃんにボールがあたってしまったら責任が取れないのでやめます。
- ・病気の人や赤ちゃん、家族の人に迷惑がかかるのでもうやめた方がいいと思います。

- ・おばさんの気持ちを考えるとやめた方がいい。
- ・人に迷惑かけてまで、好きなことをしようとは思わない。
- ・迷う。ご飯より好きなソフトボールは簡単にあきらめられないし、続けるといつかけが人が出てしまうかもしれない。
- ・続ける。おばさんの気持ちもわかるけど「やめろ。」というのはひどいと思う。ぼくらも工夫すればいいし、おばさんも何か対策を考えてほしい。
- ・ソフトボールをあきらめることはできない。おばさんはぼくたちの気持ちを考えないで一方的だ。相手の立場というのならお互いが考えないといけない。
- ・好きなことだからそう簡単にあきらめられない。
- ・それぞれの立場をはっきりさせて、自由と責任について自分の考えを発表し合った。授業の中で、互いに「わたしは、赤ちゃんがけがするかもしれないと思うと絶対に続けることはできないけど、続けるという人は赤ちゃんやお年寄りはどうなってもいいんですか。」「やめるという人は、自分の好きなことを本当にそんなに簡単にあきらめられるんですか。」というように自分と違う立場の意見を詳しく聞きながら自分の考えをよりはっきりさせていた。
- ・「ぼくは最初、今度から気をつければいいのでソフトボールは続けようと思っていましたが、みんなの意見を聞いて他の人に迷惑がかかるならやめた方がいいと思いました。」というよう授業後に立場が変わる子は多かった。

### 5 実践者からの一言

- ・実際にソフトボールで盛り上がっている男子の中にはなかなか相手の立場からものを考えることができず、「ぼくたちの立場も考えてもらいたい。」という気持ちを切り替えることがむずかしい児童もいたが、「それが、自分勝手というんだと思います。」という発言が子どもの中から出て、自分のくらしを振り返って考えていくには適した資料であった。運動場の使い方、登校班での行動、自分ではきちんとやっているつもりでもまだまだ自分勝手なこれと似たような行動は子どもたちからたくさん出てきた。

(道上小学校 高垣和子)